

## 彙報

## サイモン教授千古

榎 一 雄

(一)

ウエイレイ (Arthur Waley, 1889—1966) が亡くなった時出された追悼録に「山中独吟」(Madly Singing in the Mountains, ed. by Ivan Morris, London: George Allen and Unwin, 1970)がある。十数人の追憶の文章にウエイレイ自身の著作のアンソロジーを配し、巻末にウ氏の年譜を加えたもので、本書の題名となった白居易の詩「山中独吟」の訳も勿論その中に入っている。

その追憶記事の一つがサイモン教授の「ウエイレイ逸聞数則」(A Few Waley-esque Remarks, pp. 93-95)である。それは(一)イギリスの東洋学者のある会合で、一人が或る作品の翻譯について長々と論じ、これまでの訳を並べて見て、それが正しく解釈されるまでの経過を辿ってみることが必要であるという、相当うんざりしたウエイレイは「それよりも

それを正しく翻譯したらよいではないか」と一喝したので、一座は白けてしまったという話を最初に、(二)ウエイレイがアイヌ語の詩を翻譯して特色のある男らしい声で朗読し、続いた討論で、一人がその詩はアイヌがこれから殺そうとしている熊をどんなに愛しんだか、殺すことがどんなに嫌であったかをよく示しているという、ウエイレイはアイヌは熊も殺したがそれよりもアイヌをもっと沢山殺したと言返したとか、(三)サイモン氏が当然学問的に扱われなければならぬ事柄が、好事家的に取上げられることに驚いて見せると、ウエイレイは書いているのは四十五歳で引退した御役人連中だが、連中は大抵九十歳までは生きていたから、そうした論文はこれから益々多くなりやすよと言ったとか、(四)ウエイレイに東洋アフリカ研究学校の近くですれ違ったので、誰々の講演を聴きましたかと訊ねると、えっ、どこが一番間違ってしまったかと聞き返したとか、(五)ウエイレイがブリティッシュ・ミュージアムで調べ物をしていた時、開館・閉館等の定刻を守るのが厄介ではないかと訊ねると、「少しも」と答え、散仕事をした三十代半をすぎたら少しは休んだらよからうと思っていたのに、隔週の土曜日に一緒に食べる昼食の時間を、一時半にしましょう、午前中一杯仕事をしたいからと言われて驚かされたとか、(六)講演や討論の会合で退屈し切っているのが余所目にも見える位であるのに、一向に退出する様子

がないので、たまには逃げたらどうですと奨めると、飛んでもない、前の会合で議論されたことを蒸返すのですと言ったとか、(何故あの会から退会したのかという問に対し、いくらかことわっても委員になれと言われるので、そうするほかはなかったのですと答えたというようなことが書かれている。

イギリス人は紳士で、生真面目だということになっている。しかし実際は何時でも冗談を言つて面白がつているのがイギリス人なのである。ところがイギリス人にとって何が面白いのかということになると、我々日本人にはよく判らない。否、判つたように思えることもあるが、その場合でも果してイギリス人が感じているような面白さを我々が感じているのだろうか疑問に思うことが屢々ある。

ウッドハウス (Pelham Grenville Wodehouse, 1881—1975) は滑稽な作品、特にイギリス上流階級の喜劇的人物を書くことで名高い人である。日本に来てゐる或るイギリス人の話に、国鉄の中で読んでいて笑いが止らず、ほかの乗客から変に思われはしまいかと閉口したという。そんなに面白いのならと、早速ジークスやマリナーやプスマイスやユークリッヂを主人公にした短篇集の何冊かを取寄せたまではよかったが、読んでみてもどこが面白いのか、どこが可笑しいのか、一向に判らないのである。

サイモン教授の「ウェイレイ逸聞数則」も私には少しも面

白くもなければ、可笑しくもない。それは私には面白くなくとも、イギリス人が読めば抱腹絶倒しないまでも、頗るイクセントリックに感ずるものなのかも知れない。私はイギリス人に直接質していないので、何とも言えないけれども、ただはつきりと考えられるのは、サイモン教授がイギリス人にはこうしたことがそのように感ぜられると信じていたことである。イギリス人のように生活し、イギリス人のように考え、

教授の口吻をかりれば、「イギリス人のように遠廻りに表現する」。これが一九三六年ドイツからイギリスに移つて来、一九八一年二月二十二日八十七歳でロンドンで逝去するまで、教授がその生活の信条として力めていた所ではあるまいか。そして教授自らはイギリス人になり切つてゐると思つていたのではあるまいか。帰化するといふのを英語では to be naturalised as という。教授が戸籍の上でナチュラライズされていたのかどうか知らないが、教授は自らを完全にイギリス化した人物であると信じていたとしか考えられない。これを悲惨だと見る人もあるかも知れないが、教授自身はそれで幸福であつたのである。ロンドン大学支那語学教授、更に名誉教授、英国学士院会員、C.B.E. (Commander of the Order of the British Empire) 等の名誉ある地位と称号とを次々に与えられ、イギリスにおける近代支那学の開創者の一人として尊敬せられていた教授は、晩年にはドイツから

も在国当時の功勞に報いる優遇を受けていたと聞く。

一九五二年の末であった。自宅の食堂に宇宙線の実験装置を思わせるような壁型の電気ストーブを新設した教授は、食事の間にもそれをつけたり消したり、わざわざ開いて内部をのぞかせたりして、その働きを説明してくれた。二階の一隅にはこれ亦新しく購入した黒い電気オルガンが置かれ、その傍に立った教授は沁々とした口調で、*"I am happy."* と言って居られたが、それは聞く者の耳に如何にも幸福そうに響いた。小型のオルガンと教授の巨軀とは誠に対照的で、このオルガンを弾き、歌を唱っている教授を想像すると、頭のつかえそうな天井の低い教授の家に幸福がつまっているように思えた。教授は幸福であったのである。

ウェイレイについての追憶の中に隔週の土曜日に昼食を共にする話が出てくるが、あれはヘッドフォード・ストリートであったか、大英博物館の近くのオリヴェットというイタリア料理の店でのことである。サイモン教授はその常連で、行く时必须チーズ粉をたっぷり振りかけてスパゲッティを食べておられた。その巨大な体軀から容易に想像されるように、教授は食欲頗る旺盛で、教授の健康を心配した夫人が食事を制限させたことがあったほどであるが、イギリス人たらんと努力した教授も、流石に不味いことを自慢しているイギリス料理にだけは兜を脱いでいたのであろう、食事をする

のは専ら大陸系の、それも名の通った店であった。オリヴェットもその一つである。

(二)

ウォールター・サイモン(Ernst Julius Walter Simon, 1893—1981)教授は、一八九三年六月十日、ベルリンで生まれた。ロマンス語と古典語とを専攻し、一九二〇年、サロニカのユダヤ系スペイン語方言の特徴を論ずる論文(Charakteristik des jüdisch-spanischen Dialekts von Saloniki, In: Zeitschrift für Romanische Philologie, 40, 1920, pp. 655-689)を提出して学位(博士)を獲得した。翌一九二一年、専門の図書館員職に転じ、ベルリン大学図書館での見習を経て、キール大学の図書館に勤務し、一九二二年再びベルリン大学図書館に帰った。ここでオットー・フランケ(Otto Franke, 1863—1946)教授から支那語を教えられ、やがて自らも支那語を学生に教授するに至った。一九三二—三三年、交換図書館員として北京に赴き、北京図書館で仕事をした。交換にベルリンに來たのが誰であったのか、北京図書館での仕事の内容はどのようなものであったか、つい聞き漏したが、フランスの国立図書館のギニャール女史(Marie-Roberte Guignard, 1911—1972)と北京図書館の王重民氏との交換も確か同じ頃のことであったを思うと、当時はこうしたスキームが活潑に行

われようとしていたのであろう。王重民氏がペリオ将来の敦煌出土支那語文書の全部をライカで撮影したのはこの時のことである。そのことから推察すると、サイモン教授も北京図書館では書庫への自由な出入を許されて、自由な研究をしていたのではなからうか。私がサイモン教授から聞いたのは使用していた支那人との食品の呼び名に関してのやりとりについてである。また教授は大変に嗅覚の鋭い人で、その鼻の神通力を働かせて知り合いの支那人の家で何かを嗅ぎ当り、令名を博したことを自慢していたが、それが何であったか、記憶していない。否、記憶していないのではなく、聞いた時から何であるのか判らなかつたのである。

ところが北京から帰ってみると、ドイツはナチスの制圧の下に置かれ、ユダヤ人の国外追放が始まっていた。アインスタイン・トーマス・マンの亡命は一九三三年十二月のこと、一九三四年、サイモン教授もその出自の故を以てドイツの大学で教える資格を剝奪され、一九三五年には図書館員としての職に在ることも禁ぜられるに至った。こうして教授はロンドンに移住し、ロンドン大学で教えることになった。時に一九三六年。教授四十歳の時のことである。

英国移住は學術援護會議 (Academic Assistance Council) の援護によるものであった。同じような理由で同じ頃英国に移った支那学者にハロウン (Gustav Haloun, 1898—1961) と

シントラー (Bruno Schindler, 1882—1964) の両氏がある。ハロウン氏はヴュッチェンゲン大学から一九三五年ケムブリッジ大学に移り、一九三八年その支那学教授に任じ、シントラー氏は一九三三年ロンドンに來つてルンド・ハーナムフリーズ書店 (Lund Humphries & Co. Ltd.) と協力し、雑誌「エイシア・メイジャー (Asia Major)」を始め支那学関係の書籍の出版に當つた。

ハロウン教授は大夏考 (Seit wann kannten die Chinesen die Tocharer oder Indogermanen überhaupt? Ister Teil, Leipzig: Verlag der Asia Major, 1926)・周聲起源考 (Contributions to the History of Chou Settlement in Ancient China, In: Asia Major, 1, pp. 76-111, 587-656)・月氏考 (Zur Uertsfrage, In: ZDMG, 91, 2, 1937, pp. 243-318) 等の論文で日本の学者にも馴染の深い人であるが、シントラー氏はインレジムのレンネヒツン (Leschnitz) の生れで、ライプツィヒ大学のコンラッド (August Conradt, 1864—1925) の下で支那学を修め、一九二二年から数年間開封に居住してそのユダヤ人の後裔に接触した。それからドイツに帰つて刊行を開始したのが雑誌「アジア・マイノール (Asia Major)」である。小アジア (Asia Minor) 以外の地域のアジアの人文に関する論文を載せるといふ主旨からつけられた題名であるが、イギリスに移った氏はその新編 (New Series)

を刊行し、後ケムブリッジ・オクスフォード・ロンドンの三大学から若干の補助金を与えられ a *British Journal of Far Eastern Studies* という副題をつけ、三大学の関係教員が編輯委員として参加した。しかしその経営は困難を極め、一九七五年第一九巻を出して停刊し、途中第四巻第二号は遂に未刊に終わっている。シントラー氏の編輯は、その逝去のため第一一巻第一号（一九六四）を最後とし、それ以後の編輯に当たったのがサイモン教授であった。

シントラー氏もオリヴェッティの常連の一人であって、サイモン教授と連れ立って昼食に出かけるのをよく見かけたものである。

ナチスに迫われてイギリスに移ったユダヤ人系の学者は支那学ばかりではなく、いろいろの分野に亘っていたであろう。イスラム法学で名高いシャハト (Joseph Schacht, 1902—1969) も一九三〇年代の末に移住した一人である。尤も彼の移住は人種的理由で圧迫されたためではないというが (BSOAS, XXXIII, 2, 1970, p. 378) ナチスの支配を嫌うたのであることは明かであるから、結果的にはナチスに迫られたのである。各地に亡命した学者がそれぞれの地域の学術の発展に貢献した所は極めて大きい。これによってドイツの失ったところとドイツ以外の国々が得たところとを比較する研究がそのうちに行われるに相違ない。日本に移った

学者としては、一九三六年から四一年まで東北大学で教えた現象学のレーヴィット (Karl Löwith, 1897—1973) がある。マールブルグ大学からローマに移り、更に仙台に来たのであるが、ここでもナチスの追及を感じてニューヨークに移り、一九五二年、ハイデルベルグ大学教授としてドイツに帰った。日本がレーヴィットを五年間しか止め得なかったことは残念であるが、氏が西田幾多郎氏等の研究によって日本にフッサールやハイデッガーの学説を十分に理解し得る素地が築かれていたこと、日本の大学であるのに氏の研究に必要な書籍が殆どすべて揃えられていたことを嘆賞していたことを聞いて、多少慰められるところがある。

学者が政治的な理由から発表や行動の自由を奪われる災厄は、今日もなお絶つたわけではない。そうした運命に苛まれる学者の苦痛と窮状とは察するに余りがある。サイモン教授もその一人であったが、教授はレクチャラーからリーダーへ、リーダーから教授（一九四七—六〇）へと昇進し、更にロンドン大学東洋アフリカ研究学校の極東学部長として、学部を統率するに至った（一九五〇—六〇）。これが教授の温かい人柄と優れた学問と非凡な才能との致すところであることは言うまでもないが、一方、時勢の急転によって支那語・日本語を能くする人がイギリスで多数要求せられ、ロンドン大学東洋アフリカ研究学校がそうした人々の養成の中心機

関となったことも忘れてはならない。

時勢の急転とは太平洋戦争（一九四一—一九四五）の勃発である。イギリスは日本を敵とし、支那を同盟国として戦うことになった。通訳・検閲・情報蒐集等の仕事に当る日本語・支那語の専門家が大量に必要とされた。そのための教育を通じてイギリスには日本語・支那語の教育と研究との新しい時代が始まった。そして戦争終了の後においても、この時教育を受けた数からぬ数の人々が日本及び支那研究の新しい担当者として活躍することになった。サイモン教授はそうした新しい変化の中核にあって活躍したのである。日本語教育の中心として奮闘したのはダニエルズ教授 (Frank James Daniels, 1899—) を中心とする人々であった。一口に言えば、太平洋戦争がイギリスの日本学・支那学を復活させたのである。

イギリスのアジア研究は本来アジアの諸地域に発展し、商業・軍事・政治等の諸方面に活躍したイギリス人の間から発達した。それぞれの地域におけるイギリス勢力の消長は同時にその地域に関するイギリスの学問的研究の盛衰に直接結びついてきた。鴉片戦争以来他国を圧倒する強味を見せていたイギリスの軍事・経済面での極東支配が、二十世紀に入って日本の抬頭に圧され、次第に衰退すると、イギリスの支那・日本研究も次第に光彩を失うに至った。支那学を代表していた

ジャイルズ (Herbert Allen Giles, 1845—1933)、『日本学のチェムバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850—1935) の相次ぐ逝去は、そうしたイギリス勢力の退潮に呼応して、一九三〇年代が研究の世界でも一つの時代の終であることを示していた。そうした形勢を一挙に逆転したのが太平洋戦争であった。それはこれまで別に本業をもち、日本・支那の研究はこれを副業として行い、アマチュア的研究家の多かったイギリスの日本及び支那学界に、学校教育によって訓練せられ、研究を本業とするプロの研究家を多数注入することになり、そうした人々が戦後もイギリス内外の學術機関に職場を得て活躍した。イギリスの日本学・支那学の世界はここに至って面目を一新したのである。その新しい支那学界を築き、そのリーダーとして活躍したのがサイモン教授である。

単に教えることのみではなく、研究設備そのものが充実されたことも指摘されなければならない。ケムブリッジ大学からはハロウン教授とキードル (Eric B. Ceadel, ?—1979) 氏が、ロンドン大学からはサイモン教授とダニエルズ氏が、何れも日本に来て、日本学・支那学関係の図書を大量にそして組織的に買った。支那にも行った筈である。これによってイギリスの極東研究の図書は空前の充実を加え、それを基礎にその後も着実に補充が行われている。東洋アフリカ研究学校における極東研究図書の充実特に支那学関係のそれは、サ

イモン教授の功績の一つとして記されてはならない事業である。

ティベット語・満洲語に堪能であった教授はこれら兩種の言語の資料の蒐集整理についても貢献する所が尠くなかった。教授は早くから各国に現存する満洲語の書籍の総目録を編纂すべきことを提唱していたが(25aの序文参照)、一九一七年、オーストリアに所在の満洲語本の総目録を刊行し(W. Simon and H.G.H. Nelson, *Manchu Books in London*, London: The British Museum Publications Ltd., 1917, 22×27.5cm, 182 pp.)、更に何回かパリで出張して国立図書館所蔵の満洲語本の整理を指導した。その結果出来たのが *Catalogue du Fonds Mandchou par Jeanne-Marie Puyramond*, conservateur à la Bibliothèque Nationale, sous la haute direction de Walter Simon, professeur emeritus à l'Université de Londres, et de Marie-Rose Séguy, conservateur en chef à la Bibliothèque Nationale, Paris: Bibliothèque Nationale, 1979, 16×24.2cm., 178 pp. avec 6 planches 彩色。

## (三)

サンモン教授の学問がロマンス系の言語の研究に始まり、やがて支那語に転じたこと前述の如くであるが、教授は満洲

語・ティベット語にも研究の歩武を進めた。

ロマンス語から支那語に変わった理由については推測のほかないが、恐らく支那語の研究者が少く、関係資料の蒐集についてもなすべきことが多かったためであろう。教授に支那語・支那語について教えたフランク教授は一九二二年サイモン氏が支那語の勉強を始めた時は五十九歳、ライプツィヒ大学に在ったコンラディ教授は五十八歳、ハンブルグ大学に在ったフォルケ(Alfred Forke, 1867—1944)教授は五十五歳。いずれも顔齡に近く、これら諸家に続く人としてはヘルケス(Eduard Erkes, 1891—1958)が『淮南子』や『楚辭』の研究を中心に古代支那の民俗・伝承・文学についての論著を発表しつつある位のもので、ハロウンの活動もまだ始められていなかった。第一次大戦はドイツから支那大陸における足がかりを奪ったばかりでなく、有望な若い人材の多くを戦場で失わしめたのである。

ドイツのこうした不利な状況にも拘らず、ヨーロッパの支那言語学は一九二〇年代から二つの新しい方向に動き出した。一つはコンラディの創唱するインドシナ言語学に代表される、支那語を支那周辺の諸言語との関連において考えて行こうとするものであり、もう一つは支那語にも一般言語学的方法論を適用して研究すべきであるとするものである。フランソワのマスペロー(Henri Maspero, 1883—1945)の

接頭辞の分析と派生語の追究とを中軸とする支那語構造論、スウェーデンのカールグレン (Bernhard Karlgren, 1889—1978) による漢字中古音の復原は、後者の注目すべき実例である。言い換えると、それまで学習の対象とのみされていた支那語がこの頃始めて学問的研究の対象になったのである。

サイモン教授がロマンス語から支那語に転じたのは、恐らくそうしたドイツの内部事情とヨーロッパの学界の趨勢とが大きく影響していたのであろう。教授のティベット語研究はその支那語との親縁関係を模索することを目標としたものに相違ない。一九三〇年に発表された (17) *Thibetisch-Chinesische Wortgleichungen, Ein Versuch*, 一九五六年の (67) *A Kotish-Tibetan-Chinese Word Equation* はティベット語をそれと同じか、類似の意味をもった支那語に比較したものである。このように教授のティベット語に関する論考はいずれも常に支那語との関連を念頭に置いて書かれたものである。満洲語は支那語と系統を異にする言語である。それを教授が習得したのはティベット語の場合と違ふ理由によるようである。清朝では支那語の経書・史書・文学作品の満洲語訳が多く出版せられた。支那でキリスト教の布教に従事し、或いは學術をもって宮廷に仕えたヨーロッパ人宣教師はまず満洲語を学習してその用務を弁じた。それは皇帝との会話に便利であるということのほかに、支那語より遙かに学習が容

易であったからである。サイモン教授の満洲語も支那語理解の補助として習得されたのではあるまいか。教授が東洋フリカ研究学校で教えている時、支那語を専攻する学生の必須科目の一つに「カンボン(漢文)」というのがあった。これは日本語による漢文の訓読を指す。教授は早稲田大学出版部から出された漢籍国字解全書全三六冊を支那古典読解の主要参考書の一つに挙げるのが常であったが、それから知られるように日本語による漢文の解釈を支那古文学理解の重要な手掛りの一つとしていた。教授の満洲語も漢文と同様の意味で重要視されていたように思われる。教授の蔵書の中にも支那文の典籍を訳した満洲文の書籍が少からずあった。それは晩年東洋フリカ研究学校の図書館に売られたようである。

サイモン教授の支那語研究に対する貢献は(一)支那語教育に関するものと、(二)支那語についての学問的研究との二方面に分けて考えることが出来る。

(一)支那語教育については、それが支那語の知識を有った専門家を大至急養成しようという時勢の要求に応えたものであったこと前述の通りであるが、まず趙元任の創めた漢字音のローマ字化方式即ち国語羅馬字を採入れ、英語の発音を示すローマナイゼイションを用いて、四声の区別が自から判る様式を採用した。この方式はその後中華人民共和国制定の拼音方案に代られたが、教授自身は最後まで国語羅馬字を用い



た。そしてこの方式を用いたいくつかの学習書を編纂した。一九四二年刊の(43) *The New Official Chinese Latin Script GWOYEJU ROMATZYH* は始まり一連の入門書がそれである。

(二)支那語の学問的研究では、漢字の古代音の復原と助詞の用法と意義との解明を中心とする文法学的研究が挙げられる。古代音の復原については、一九二四年刊の(2) *Das erste etymologische Wörterbuch der chinesischen Sprache* (カールグレンの *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese* の批評) や一九三八年刊の(40) *The Reconstruction of Archaic Chinese* があるが、そのティベット語研究の論文の多くが支那語との共通の語源(語祖と言わば)の追究を指摘していることは、前に一言した通りである。助詞の用法と意義との解明に関する研究もいくつがあるが、中でも一九五二年から五四年まで四回に亘って *Asia Major* (New Series) に発表された(58), (59), (60), (62) *Functions and Meanings of Erlking* は分量最も多く、内容最も豊かなものである。この論文が出ると口舌がない学生連は教授に *Erlking* というニックネームを奉った。それがゲーテの同名の詩に基づくことは言うまでもあるまい。「大作を御出しになりましたね。大変な御苦心だったと思います」と言う、教授は莞爾として「Several sleepless nights (の奮闘

の結果ですよ)」と答えられた。知る人ぞ知る教授には吃る癖がある。その教授の *Several sleepless nights* には文字には表わせない独特の抑揚と中絶とがあって、今日でもこの時の教授の顔附を容易に想い出すことが出来る。ゲーテの作品は夜 *Erlking* に追われる息子を抱き、馬に乗って逃げる父親を詠じたもので、そこに描かれている *Erlking* は一種の物の怪であるが、*Erlking* の名から黒衣を纏って夜の世界を横行している教授を連想すると、如何にも面白そうにして朗かに物の怪らしく振っている教授が想像されて、誠に愉快である。

辻直四郎博士はサイモン教授のティベット語研究を見て、日本でティベット語をやっている人々も何故サイモン氏のようにやらないのだろうかと言われたことがある。それは多分ティベット語の文法学的性格の分析ということであろうと思ふが、ティベット語にしても支那語にしても出来る限り広く読み、多くの用例を拾って、その文法学的性格を明かにして行くというのが、サイモン教授のやり方であった。その方法論と成果についてはそれぞれの分野の専門家の評価に俟ちたい。

東洋アフリカ研究学校での教授の講義の一つに支那書誌(*Chinese Bibliography*) というのがあった。どういふことをするのだろうかと一度出たことがある。一九五二年の末か

五三年の始であった。マテオリッチの著述のことが採上げられていた時間で、十何人かの出席者に向つて、リッチの著述を何か知っているかと問い、その答を手がかりにその書物のことを何で知ったかとか、その新版はこれだとかいふことから始めて、明清時代支那に來たキリスト教宣教師の著述を調べる場合にはフィステ (Louis Fister) を見たらよいとか、ゾムマーフォーゲル (Carlos Sommervogel) を見よとか、或はコルディエ (Henri Cordier) の書目もあるとかという、書目一般の話に發展して行つたことを憶えている。日本の大学の講義とは違つて言わば一種の雑談のようなものであった。その時、図書館へは出来るだけ出入し、本棚の間を歩き廻れ、そして注意を惹いた本があつたら引き出して見よ、これも大切な勉強であるという意味のことを述べておられた。

教授は何によらず辞書を重んずる人であつた。そんなに信頼しても大丈夫なのかと思うこともある位であつた。辞源とか辞海とか、或いは大字典とか近藤李氏の支那学芸大辞典等、教授が常に用いられる辞書の話もこの講義の中で採上げられたに相違ない。教授から何回か書物を頂戴したが、それは決つて H. C. Wylid の The Universal English Dictionary とか C. T. Onions の Oxford Dictionary of English Etymology とか、或は辞書の類々であつた。今日でも座右に置いて

教授の温情を偲んでいる。

教授は一九五一年書籍購入のために東京に來られ、丸の内ホテルに滞在して、神田等の書店に出かけられたが、東洋文庫にも書庫の見学に來られた。そして一九五二―五三年私を客員教授として東洋アフリカ研究学校に招聘して下さつた。ロンドンに在つて多くの学者に会い、東洋学関係の研究機関に出入りできたのは全く教授の厚意によるものである。

一九五八年、東洋文庫に名誉研究員の制度が出来る、早速教授にも加つて頂き、一九六九年には客員研究員として東洋文庫に滞在して研究して頂いた。教授は専らティベット語書籍の研究とアジア関係の言語学者との交流とに つとめられた。これは日本學術振興会の費用で來て頂いたもので、歸られる時に十二、三行の簡単な報告書を提出された。それは東洋文庫を経て日本學術振興会に届けられたが、その中に東洋文庫から大きな机を貸与されて便利であつたことが特筆大書されていた。ここにも私は教授のユーモアを感じた。やはり教授はイギリス人になりきろうとして居られたのである。

### サイモン教授関係記事及び著作目録

#### (一) サイモン教授関係記事

Congratulatory Address to Professor Walter Simon (in

Latin), In: *Asia Major* (New Series), X, 1, 1963, (p.1);  
 Congratulatory Address to Professor Walter Simon (in  
 Chinese), In: *Asia Major* (New Series), X, 2, 1963;  
 List of Publications by Professor W. Simon, by B.  
 Schindler, In: *Asia Major* (New Series), X, 1, 1963,  
 pp. 1-8; In Honour of Walter Simon 慶祝西門華德教  
 授八十歲論文集 Bulletin of the School of Oriental  
 and African Studies, University of London, XXXV,  
 2, 1973, which contains C.R. Bawden, Professor  
 Emeritus Walter Simon, pp. 221-223 and 23 articles  
 contributed by 23 authors; Obituary Notice (by C.R.  
 Bawden) in *The Times*, Feb. 25, 1981.

㊠ 概述序 (シムン博士に對する祝言)  
 シムン教授の退任を記念して

Abbreviations:

- A.M. (F.S.) = *Asia Major*, First Series, Leipzig 1924  
     ff.
- A.M. (N.S.) = *Asia Major*, New Series, London 1948  
     ff.
- B.S.O.A.S. = Bulletin of the School of Oriental and  
     African Studies, London.

D.L.Z. = *Deutsche Literaturzeitung*.

H.J.A.S. = *Harvard Journal of Asiatic Studies*.

M.S.O.S. = *Mitteilungen des Seminars für Ori-  
 entalische Sprachen*.

O.L.Z. = *Orientalistische Literaturzeitung*.

O.Z.(N.F.) = *Ostasiatische Zeitschrift* (Neue Folge).

S. = *Sinica*.

T.P. = *T'oung Pao*.

T.Ph.S. = *Transactions of the Philological So-  
 ciety*.

Z.V.S. = *Zeitschrift für Völkerpsychologie und  
 Soziologie*.

Z.R.Ph. = *Zeitschrift für Romanische Philologie*.

1 1920  
 Charakteristik des judenspanischen Dialekts von Sa-  
 loniki. In: *Z.R.Ph.* Vol. 40, pp. 655-689.

2 1924  
 Das erste etymologische Wörterbuch der chinesischen  
 Sprache, being a Review of B. Karlgren, *Analytic  
 Dictionary of Chinese and Sino-Japanese*, Paris 1923.  
 In: *D.L.Z.* 1924, cols. 1905-1910.

1925

- 3 Review of P. Andreas Eckhardt, Koreanische Konversationsgrammatik mit Lesestücken und Gesprächen (nebst Schlüssel), Heidelberg 1923. In: *O.Z.* Neue Folge II, Heft 1, pp. 112-116.
- 4 Die nationalsprachliche Bewegung in China. In: *D.L.Z.* 1926, cols. 1961-1974.
- 4a Review of Max Walleser. Zur Aussprache des Sanskrit und Tibetischen (=Materialien zur Kunde des Buddhismus, Heft 11), Leipzig 1926. In: *D.L.Z.* 1926, cols. 1238-40.
- 1927
- 5 Die Spaltung der chinesischen Tiefenreihe. In: *A.M.* (F.S.) Vol. IV, pp. 612-618.
- 6 Zur Rekonstruktion der alchinesischen Endkonsonanten, I. In: *M.S.O.S.* Vol. XXX (1927), Abteilung 1, pp. 147-167; Teil II in: *M.S.O.S.* Vol. XXXI (1928), Abteilung 1, pp. 175-204 Both parts were issued separately by Walter de Gruyter, Berlin 1928, 21 pp. and II, 1929, 30 pp.
- 7 Review of Bernhard Karlgren, Dictionary of Chinese Dialects (*Études sur la phonologie chinoise*, Livr. 4 (fin)=Archives d'Études Orientales, Vol. 15, 4. Stockholm 1926. In: *D.L.Z.* 1927, cols. 258-260.
- 1928
- 8 Review of Theodor Bröning, Laut und Ton in Süd-Schantung. Mit Anhang: Die Töne in Nordostschantung, Peking, Sötschuan, Shanghai, Amoy und Canton. Hamburg 1927. In: *D.L.Z.* 1928, cols. 1252-1254.
- 9 Contributions "Burmese" and "Chinese". In: Lautzeichen und ihre Anwendung in verschiedenen Sprachgebieten, Berlin 1928. *Birmanisch*, pp. 105-110 and *Chinesisch* 96-104. Also as "Sonderabdrucke" published by the Reichsdruckerei.
- 10 Zur Rekonstruktion der alchinesischen Endkonsonanten II. (see above, No. 6) In: *M.S.O.S.* Vol. XXXI, Abteilung 1, pp. 175-204.
- 10a Review of Nobuhiro Matsumoto, Le Japonais et les langues austrorasiatiques, Paris 1928. In: *O.Z.* (N.F.) VII, Heft 3/4, p. 136.
- 11 Review of Rose-Innes, Beginners' Dictionary of Chinese-Japanese Characters. 2nd enlarged edition.
- 1929

- Yokohama and London 1927. In: *O.L.Z.* 1929, cols. 705-707.
- 12 Phonetic Transcription (after the System of the International Phonetic Association) in Chinese Literature and Everyday Talk. Selections spoken or sung on Gramophone Records (edited by W. Schütler). Stuttgart, Zentralstelle für das phonographische Unterrichtswesen, 1929.
- 13 Addenda to the Reprint of H.A. Jäschke, Tibetan Grammar (jointly with A.H. Francke), Berlin 1929, pp. 105-161.
- 14 Review of P. Joh. Weig, Deutsch-chinesischer Sprachführer mit Wörterbuch, Tsingtau 1928 und Seyl/Kalenkirchen 1928. In: *O.L.Z.* 1929, col. 125. 1930
- 15 Review of N.E. Isenonger, The Elements of Japanese Writing, London, R.A.S., 1929. In: *O.L.Z.* 1930, col. 1055.
- 16 Yen-wen-dui-dschau 日文對照 und Kokuyaku-Kanbun 國譯漢文. *Eine bibliographische Zusammenstellung.* In: *M.S.O.S.* Vol. XXXIII, Abteilung 1, pp. 155-181.
- 17 Tibetisch-Chinesische Wortgleichungen. *Ein Versuch.* In: *M.S.O.S.* Vol. XXXII, Abteilung 1, pp. 157-228, also separately 1930 im Verlag von Walter de Gruyter, Berlin, Leipzig 1930, 72 pp.
- 18 Review of Th. Mittler, Chinesische Grammatik, Einführung in die Umgangssprache. Yenchowfu 1927. In: *O.L.Z.* 1930, cols. 229-231.
- 19 Review of E. Hauser, Huang-Ts'ing K'ai-Kuo Fang-Lieh. Die Gründung des mandchurischen Kaiserreiches. Berlin, De Gruyter, 1926. In: *Z.V.S.* Heft 3, 1930, pp. 329-331. 1931
- 20 Nachrichten zu 'Yen-wen dui-dschau und Kokuyaku-Kanbun'. In: *M.S.O.S.* Vol. XXXIV, Abteilung 1, pp. 150-152.
- 21 Review of E. Haenisch, Lehrgang der chinesischen Schriftsprache, 2 Bde. Leipzig, *Asia Major*, 1929 und 1931. In: *D.L.Z.* 1931, cols. 2121-2126. 1932
- 22 Neue Hilfsmittel zum Studium der nordchinesischen Umgangssprache (I), this being the title of a review of 4 works: (a) Yssière, *Premières Leçons de*

- 22 *Chinois*; (b) J. Bruce, E.D. Edwards and C.C. Shu, *Chinese*; (c) S.N. Usov et Čžen Aj-Tan *Učebnik kitajskogo razgovornogo jazyka*; (d) J. Müller, *Het chinesesch Taaleigen*. In: *O.L.Z.* 1932, cols. 706-709.
- 23 Review of Stuart N. Wolfenden, *Outlines of Tibeto-Burmese Linguistic Morphology*, London, R.A.S. 1929. In: *O.L.Z.* 1932, cols. 502-504.
- 1933
- 24 Review of Everard Fraser, *Index to the Tso Chuan*. Revised and prepared by J. H. St. Loehart, London, Oxford U.P. 1930. In: *O.L.Z.* 1933, cols. 129-130.
- 25 Zur Bildung der Antithetischen Doppelfrage im Neuhochnochinesischen. In: *S. Vol. VIII*, pp. 216-220.
- 25a Romanised Index and Foreword to "Union Catalogue of Manchu Books in the National Library of Peiping and the Library of the Palace Museum" by Li Teh Chi. Peiping 1933.
- 1934
- 26 Review of M. Honorat, *Démonstration de la parenté de la langue chinoise avec les langues japhétiques, sémitiques et chamitiques*. In: *O.L.Z.* 1934, col. 764.
- 27 Die Bedeutung der Finalpartikel 矣. In: *M.S.O.S. Vol. XXXVIII*, Abteilung 1, pp. 143-168.
- 28 Neue Hilfsmittel zum Studium der nordchinesischen Umgangssprache (II), this being the title of a review of 17 works. (1a) Čžen Czy-bi i N.S. Levuškina: *Vtoroj šag izučeniija kitajskogo razgovornogo jazyka*; (1b) Čžen-Czy-bi i P. V. Kupušinskaja: *Vtoroj šag izučeniija kitajskogo razgovornogo jazyka*; (1c) S.N. Usov i Čžen Czy-bi: *Učebnik soedinenij kitajskogo razgovornogo jazyka*; (1d) S.N. Usov: *K voprosu ob izučenii pišma ieroglifov*; (1e) Zeibelič (W. Seuberlich): *Kitajskij ieroglif*; (1f) S.N. Usov i E. Gui-njaň: *Praktičeskij kurs fonetiki*; (1g) P.F. Licharevskij, Čžen Čhaj-čuaň i E. Gui-njaň: *K sporniku rasskazov "Tun-Chua"*; (1h) E. Gui-njaň: *Sbornik statej*; (1i) Čaiň Sin-u: *Sbornik statej*; (1k) Šu Eň-čen i V.F. Pučko: *Grazdanskostvoedenie*; (1l) S.N. Usov, Baj Juň-če i E. Gui-njaň: *Sbornik gazetyňch zametok*; (1m) S.N. Usov i E. Gui-njaň: *Sbornik statej*; (1n) S.N. Usov i E. Gui-njaň: *Osnovyne položeniija i opyt prepodavaniija kitajskogo razgovornogo jazyka*; (1o) *Ekzaminacionnaja*

*programma po kitajskomu jazyku.*

- All. these were published in Charbin 1030, 1931 and 1932.
- (2) F. Lessing u. W. Othmer: *Lehrgang der nord-chinesischen Umgangssprache*; 2. unveränderte Auflage, Shanghai 1933.
- (3) J.M. Mc-Hugh: *Introductory Mandarin Lessons* or *Hua Yü Hsin Chieh Ching*. Shanghai 1931.
- (4) Henry S. Aldrich, Hua Yü Hsiü Chi: *Practical Chinese, including a topical dictionary of 5000 everyday terms*. Peiping 1931.
- In: *O.L.Z.* 1934, cols. 478-481.
- 1935
- 29 Review of S. Yoshitake, *The Phonetic System of Ancient Japanese*, London 1934. In: *O.L.Z.* 1935, cols. 260-261.
- 30 Review of Wang Li, *Une prononciation chinoise de Po-Pei*, Paris 1932. In: *O.L.Z.* 1935, cols. 334-336.
- 31 Review of P.E. Skáčkov, *Bibliografija Kitaja. Sistematičeski ukazatel' knig i žurnal'nych statej o Kitae na russkom jazyke 1730-1930*, Moskva, Leningrad 1932. In: *O.L.Z.* 1935, cols. 762-763.
- 1936
- 32 Review of Georges Margouliès: *Petit Précis de Grammaire Chinoise écrite*, Paris 1934. In: *O.L.Z.* 1936, col. 564.
- 33 Review of Fu Si-Nien und Hu Schü: *Das Studium der Klassiker im Neuen China. Zwei aktuelle Aufsätze* bearb. von F. Jäger. In: *O.L.Z.* 1936, col. 570.
- 34 Review of H.N. von Körper, *Morphology of the Tibetan Language*. In: *Luzac's Oriental List and Book Review Quarterly*. Vol. XLVII, p. 55. 1937
- 35 Review of F. W. Thomas, *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan*. In: *Luzac's Oriental List and Book Review Quarterly*, Vol. XLVIII, p. 2.
- 36 Review of Jubiläumshand herausgeg. von der "Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens" anlässlich ihres 60-jährigen Bestehens 1873-1933. 2 Teile. Tokyo und Leipzig (Asia Major) 1933. In: *O.L.Z.* 1937, cols. 127-129.
- 37 Review of F. Hübhofer, *Die Sutra über Empfängnis und Embryologie*, Tokyo und Leipzig 1932. In:

- O.L.Z.* 1937, cols. 256-257.
- 38 Has the Chinese Language Parts of Speech? In: *T.Ph.S.* 1937, pp. 99-119. 1938
- 40 The Reconstruction of Archaic Chinese. In: *B.S.O.A.S.* Vol. IX, pp. 267-288. 1939
- 40a Review of A Dictionary of Chinese Buddhist Terms with Sanskrit and English Equivalents and a Sanskrit-Pali Index. By W.E. Soothill and L. Hodous. London 1937. In: *B.S.O.A.S.* Vol. IX, pp. 1070-72.
- 40b Review of Bibliographie von Japan 1933-5. Mit Ergänzungen für die Jahre, 1906-1932. Von H. Praesent und W. Haenisch, Leipzig 1937. In: *B.S.O.A.S.* Vol. IX, pp. 1072-1073. 1941
- 41 Certain Tibetan Suffixes and their Combinations. In: *H.J.A.S.* Vol. V, (1941), pp. 372-391. 1942
- 42 Tibetan *dat*, *cin*, *kyin*, *jin* and *ham*. in: *B.S.O.A.S.* Vol. X, pp. 954-975.
- 43 The New Official Chinese Latin Script *GWOYEU*
- ROMATZYH. Tables, Rules, Illustrative Examples.* London, Probsthain, 1942, demy 8vo, 63 pp.
- 44 Chinese Sentence Series. *First Fifty Lessons with two bibliographical Appendices* (With Dr. C.H. Lu). Part I: Text in *Gwoyew Romatzyh* with Translation. London 1942, 8vo, 230 pp. 1943
- 45 Chinese National Language (Gwoyew) Reader and Guide to Conversation (with Dr. C.H. Lu). London 1943. (Second revised edition 1954), 204 pp. 1944
- 46 Chinese Sentence Series. *First Fifty Lessons, Part II.* Text in Chinese Characters with Translation. London 1944. 8vo, 166 pp. (Second Impr. 1956).
- 47 Gwoyew Romatzyh. Chinese-English Vocabulary. (Chinese Sentence Series, Part III), London 1944, vi, 55 pp.
- 48 1200 Chinese Basic Characters. London 1944. (Second Edition 1947; Third Revised Edition 1957, xvi, 334 pp.) Revised.
- 49 How to Study & Write Chinese Characters. Chinese Radicals & Phonetics. *With an Analysis of the*



- “1200 Chinese Basic Characters”. London 1944. (Revised Reprint 1945; Second Revised Edition 1959, xlv, 439 pp.)
- 50 The Chinese National Language and the Dialects. In: *Geographical Handbook* (Admiralty), Volume I (China Proper), 1944. Chapter XV, pp. 454-462.
- 50a Review of Tibetan Word Book; Tibetan Syllables and Tibetan Sentences, by Sir Basil Gould and Hugh Edward Richardson. In: *Asiatic Review*, 1944, pp. 346-347.
- 1945
- 51 Structure Drill through Speech Patterns. *First Fifty Patterns* (Edited by B. Schindler and W. Simon). No. 1. Structure Drill in Chinese by W. Simon and T. C. Chao. London 1945, x, 101 pp.
- 52 How to Study & Write Chinese Characters. Revised Reprint. See No. 49.
- 1947
- 53 A Beginners' Chinese-English Dictionary of the National Language (Gwoyueu). London 1947. Second Revised Edition 1958. 1214 pp.
- 54 1200 Chinese Basic Characters. Second Revised Edition, 1947. See No. 48.
- 54a Structure Drill in Spanish (see No. 51), together with G.A. Mode, B.A. London 1949, crown 8vo, 130 pp.
- 1948
- 55 Bih 比=Wey 為? In: *B.S.O.A.S.*, Vol. XII, pp. 789-802.
- 1949
- 56 Review of J. de Francis, Beginning Chinese (Yale Linguistic Series) (ed. by H.C. Fenn and George Kennedy), New Haven 1946. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XIII, pp. 251-252.
- 1951
- 56a The Range of Sound Alternations in Tibetan Word Families. In: *A.M.* (N.S.) Vol. I, pp. 3-15.
- 57 Der erl jian 得而見 und Der jian 得見 in Luenyen 論語 VII, 25. In: *A.M.* (N.S.) Vol. II, pp. 46-47.
- 1952
- 57a Obituary of Gustav Haloun. In: *J.R.A.S.* 1952, pp. 93-95.
- 58 Functions and Meanings of Erl 而. In: *A.M.*

- (N.S.) Vol. II, pp. 179-202.  
1953
- 59 Functions and Meanings of Erl 而 (II). In: *A.M.* (N.S.) Vol. III, pp. 7-18.
- 60 Functions and Meanings of Erl 而 (III). In: *A.M.* (N.S.) Vol. III, pp. 117-131.
- 61 Introduction (pp. ix-xlii) to *1200 Chinese Basic Characters for Students of Cantonese*. An adaptation for Students of Cantonese of W. Simon's National Language Version by K. P. K. Whitaker. London 1953, xlii, 316 pp.  
1954
- 62 Functions and Meanings of Erl 而 (IV). In: *A.M.* (N.S.) Vol. IV, pp. 20-35.
- 63 Chinese National Language (Gwoyueu) Reader. Second Revised Edition 1954. 204 pp. See No. 45.  
1955
- 64 A Note on Tibetan Bon. In: *A.M.* (N.S.) Vol. V, pp. 5-8.
- 64a Obituary of J.J.L. Duyvendak (28th June 1889-9th July 1954). In: *Yearbook of the Royal Netherlands Academy of Sciences 1954-1955* (in Dutch). See parately also in English (6 pp.).  
1956
- 65 Tibetan *So* and Chinese *Ya* "Tooth". In: *B.S.O.A.S.* Vol. XVIII, pp. 512-13.
- 66 Review of ASIATICA. Festschrift Friedrich Weller. Zum 65. Geburtstag gewidmet von seinen Freunden, Kollegen und Schülern (Herausgeg. von J. Schubert und U. Schneider). In: *A.M.* (N.S.) Vol. V, pp. 235-236.
- 67 A Kottish-Tibetan-Chinese Word Equation. In: Studies presented to Hu Shih on his sixty-fifth Birthday: *The Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica*. Vol. XXVIII pp. 441-443.  
1957
- 68 Tibetan *gseb* and Cognate Words. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XX, pp. 523-532.
- 69 Two Final Consonantal Clusters in Archaic Tibetan. In: *Studies presented to Yuan Ren Chao, on his sixty-fifth Birthday: Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica*, Vol. XXIX pp. 87-90.

- 69a 1200 Chinese Basic Characters. Third Revised Edition, 1957, xvi, 334 pp. See Nos. 78 and 54.  
1958
- 70 Obituary of Evangeline Dora Edwards. In: *B.S.O. A.S. Vol. XXI*, pp. 220-223.
- 70a A Note on Chinese Texts in Tibetan Transcription. In: *B.S.O.A.S. Vol. XXI*, pp. 334-343.
- 71 A hPhags-pa seal of 1295. In: *A.M. (N.S.) Vol. VI*, pp. 203-205.
- 72 A Beginners' Chinese-English Dictionary of the National Language (Gwoyueu). Second Revised Edition. 1958, 1244 pp. See No. 53.  
1959
- 73 The Attribution to Michael Boym of Two Early Achievements of Western Sinology. In: *A.M. (N.S.) Vol. VII*, (Arthur Waley Anniversary Volume), pp. 165-169.
- 74 How to Study & Write Chinese Characters. Chinese Radicals & Phonetics. *With an Analysis of the 1200 Chinese Basic Characters*. Second Revised Edition, with the addition of the Cantonese pronunciation of the Radicals and all Basic Characters, 1959, xlv, 439 pp. See No. 52.
- 75 Review of Robert Schaler, Bibliography of Sino-Tibetan Languages, Wiesbaden 1957. In: *O.L.Z.*, 1959, cols. 201-2.
- 76 The China Illustrata Romanisation of João Soeiro's (Soeiro's) *Sanctae Legis Compendium* and its Attribution to Michael Boym. In: *Studia Serica Bernhard Karlgren Dedicata* (Copenhagen 1959), pp. 265-270.
- 76a Structure Drill in Chinese. Second Revised Edition 1959: See No. 51.  
1960
- 77 A Chinese Prayer in Tibetan Script. In: *Liebhenthal Festschrift: Sino-Indian Studies*, Vol. V, Pts. 3 and 4, pp. 192-199.
- 78 Introduction: pp. xii-xxii and Romanised Japanese Versions to all texts of Y. C. Liu, Fifty Chinese Stories, selected from Classical Texts, romanised and translated into Modern Chinese. London 1960, 256 pp.  
1961
- 79 A Note on a Manchu-Latin Dictionary. In: *Studia*

- Sino-Altaica. Festschrift für Erich Haenisch zum 80. Geburtstag*, (Wiesbaden, 1961), pp. 187-194.  
1962
- 80 Tibetan *par*, *dpar*, *spar*, and Cognate Words. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XXV, pp. 72-80.  
1965
- 81 Obituary of Dr. Bruno Schindler, with List of Publications. In: *A.M. (N.S.)* Vol. XI, pp. 93-100.
- 82 Review of John Lust (comp.), *Index. Sinicus, a Catalogue of Articles relating to China in Periodicals and Other Collective Publications 1920-1955*, Cambridge 1964. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XXVIII, pp. 661-662.  
1966
- 83 Tibetan Nyin-rans and T'o-rans. In: *A.M.* Vol. XII, pp. 179-184.  
1967
- 84 The Tibetan Particle *re*. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XXX, pp. 117-126.
- 85 Review of H. Ritter & M. Plasner (tr.), *Pseudo-Magriti: "Picatrix", das Ziel des Weisen*, London 1962. In: *O.L.Z.* Vol. LXII, pp. 178-181.
- 86 Review of Chauncey Goodrich, *A Pocket Dictionary, Chinese-English, and Pekingese Syllabary*, Hong Kong 1965. In: *A.M. (N.S.)* Vol. XIII, p. 240.
- 87 Review of Eberhardt Richtern, *Tibetisch-Deutsches Wörterbuch*, Leipzig 1966. In: *A.M. (N.S.)* Vol. XIII, pp. 253-254.  
1968
- 88 Tibetan *re* in its Wider Context. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XXXI, pp. 555-562.
- 89 Review of Walter Fuchs, *Chinesische und mandjurische Handschriften und seltene Drucke nebst einer Standortliste der sonstigen Mandjurica*, Wiesbaden 1966. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XXXI, pp. 451-452.  
1969
- 90 Cognates of Tibetan Rans-Pa ('Entire, Complete') with Guttural Stem Initial. In: *中央研究院歷史語言研究所集刊*. 39—慶祝李方桂先生六十五歲壽文集, 下, pp. 287-289.
- 91 Tibetan Nyin-rans and T'o-rans. In: *Studia Asiae*, pp. 235-243.
- 92 Review of Manfred Taube, *Tibetische Handschriften und Blockdrucke*, Wiesbaden 1966. In: *B.S.O.A.S.*

- Vol. XXXII, pp. 232-233.
- 93 Review of Josef Kolmaš (ed.), *A Genealogy of the Kings of Derge: Sde-dge'i rgyal-rabs*, Prague 1968. In: *B.S.O.A.S. Vol. XXXII*, pp. 638-639.
- 94 Review of Ferdinand D. Lessing & Alex Wayman (ed. & tr.), *Mkhas-grub-ri'e's Fundamentals of the Buddhist Tantras: Rgyud sde spyi'i rnam par gzag pa rgyas par brjod*, The Hague & Paris 1968. In: *B.S.O.A.S. Vol. XXXII*, pp. 670-671.
- 95 Review of David Snellgrove & Hugh Richardson, *A Cultural History of Tibet*, London [1968] In: *B.S.O.A.S. Vol. XXXII*, p. 671.
- 1970
- 96 A few Waleysque Remarks, In: *Madly Singing in the Mountain*, ed. by Ivan Morris, London: George Allen and Unwin, 1970, pp. 93-95.
- 97 A Note on the Tibetan Version of the Karmavibhanga preserved in the MS Kanjur of the British Museum. In: *B.S.O.A.S. Vol. XXXIII*, pp. 161-166.
- 98 Review of Stuart H. Buck, *Tibetan-English Dictionary*, with Supplement, Washington, D.C. 1969. In: *B.S.O.A.S. Vol. XXXIII*, pp. 222-223.
- 1971
- 99 Review of Kamil Sedláček, *Das Gemein-Sino-Tibetische*, Wiesbaden 1970. In: *T.P. Vol. LVIII*, pp. 343-345.
- 1972
- 100 Review of Michael Hahn, *Lehrbuch der klassischen tibetischen Schriftsprache, mit Lesestücken und Glossar*, Hamburg 1971. In: *B.S.O.A.S. Vol. XXXV*, pp. 175-176.
- 101 Tibetan *lh-* and *hr-* in Alternation with Other Initial; Consonantal Clusters, or with Simple Initial *l-* and *r-*. In: *A.M. (N.S.) Vol. XVII*, pp. 216-222.
- 102 An Incomplete Copy of a Sutra incorporated in the Peking Print of the Tibetan Kanjur. In: *B.S.O.A.S. Vol. XXXV*, pp. 334-337.
- 1973
- 103 Review of Walter Fuchs, *Die mandjurischen Druckausgaben des Hsin-ching (Hridayasūtra) mit Reproduktion der vier- und funfsprachigen Ausgabe*, Wiesbaden 1970. In: *A.M. (N.S.) Vol. XVIII*, p. 125.
- 104 Review of Claus Vogel, *The Teachings of the Six Heretics*. According to *Pravrajyāvastu* of the Tibetan

- Mūlasarvāstivāda Vinaya, Wiesbaden 1970. In: *A.M.* (N.S.) Vol. XVIII, p. 252.
- 105 Review of Martin Gimm (Hrsg.), *Die Kaiserliche Ku-wen-Anthologie von 1685/6 Ku Wen Yuan-Chien in mandjurischer Übersetzung*, Bd. I, Kap. 1-24, Wiesbaden 1969. & *Die chinesische Anthologie Wen-Hsian in mandjurischer Teilübersetzung einer Lemingrader und einer Kölner Handschrift*, Wiesbaden 1968. In: *A.M.* (N.S.) Vol. XVIII, pp. 228-229.
- 106 Review of Paul K. Benedict, *Sino-Tibetan: A conspectus*, Cambridge 1972. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XXXVI, pp. 173-174.  
1974
- 107 Vowel Alternation in Tibetan. In: *A.M.* Vol. XIX, pp. 86-99.
- 108 Loss of *l* or *r* in Tibetan Initial Consonantal Clusters. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XXXVII, pp. 442-445.  
1975
- 109 Tibetan Initial Clusters of Nasals and R. In: *A.M.* (N.S.) Vol. XIX, pp. 246-251.
- 110 Iotization and Palatalization in Classical Tibetan. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XXXVIII, pp. 611-614.
- 1976
- 111 Review of Walther Heissig, *Catalogue of Mongol Books, Manuscripts and Xylographs*, Copenhagen 1971. In: *J.R.A.S.* 1976, pp. 89-90.  
1977
- 112 Manchu Books in London. A Union Catalogue. (with Howard G.H. Nelson), London 1977. 182 pp.
- 113 Alternation of Final Vowel with Final Dental Nasal or Plosive in Tibetan. In: *B.S.O.A.S.* Vol. XI, pp. 51-57.  
1978
- 114 Review of Helwig Schmidt-Glinter, *Das Hungning Chi und die Aufnahme des Buddhismus in China*, Wiesbaden 1976. In: *J.R.A.S.* 1978, p. 104.  
1979
- 115 Tibetan stes, stes-te, etc., and some Sanskrit Correspondences. In: *B.S.O.A.S.* Vol. LXII, pp. 334-336.